

「青が散る」の構造

真 銅 正 宏

The structure of 'Ao ga chiru'

Masahiro SHINDO

はじめに

宮本輝は、追手門学院大学の第一期生であり、同大学附属図書館には、宮本輝ミュージアムが併置されている。よく知られるとおり、彼の大学時代をモデルにした小説が「青が散る」(『別冊文藝春秋』一九七八年九月(一四五号)〜一九八二年一〇月(一六一号))で、一九八三年には、TBSテレビ系で、全一三回のドラマとして放映された。一九八三年一〇月二日から一九八四年一月二七日の金曜日夜八時から九時の枠で、出演は、石黒賢、二谷友里恵、川上麻衣子、佐藤浩市他であった。残念ながら、ドラマは、東京郊外に舞台が移されていた。

小説においては、宮本輝、当時の宮本正仁がモデルであろうと

思われる椎名療平と、キャプテンの金子慎一は、予定では四年後にできるというテニスコートを前倒して作るために、学長に直談判し、ポケットマネーから、コートを作るための土をトラック三台分もらい、高校用のグラウンドの一角に、スコップとツルハシとで、一ヶ月かけて、まさしく手作りしたことになっている。ただし宮本輝自身は、「青が散る」の「あとがき」に、慎重にも次のように書いている。

けれども「青が散る」は「道頓堀川」同様、自伝小説ではありません。二、三、モデルとなっている者もいますが、青春という舞台の上に思いつくままに私が創りあげた虚構の世界で、実際に起こった事件も何ひとつありません。

したがって、この小説の読み方としては、本来は、モデルさがしをするよりも、どう作られているのかを読み取るべきと思われる。「青が散る」は、小説としても、読者を惹きつけるための典型的な構造を持つ小説なのである。

一、小説の舞台と筋

小説全体の構成について検討する場合、まずその時間的な枠取りがどうなっているのか、が問題となる。同様に、どこが舞台と設定されているのかも、極めて重要である。

椎名療平は、大阪郊外の茨木市に新設された大学に、あまり気が進まぬまま、その手続きのために訪れる。事務室の前で佐野夏子を見かけ、彼女に惹かれたせいもあり、入学を決め、この夏子への気持ちを中心に、物語は動き始める。やがて出会った巨漢の金子慎一という男に誘われ硬式テニス部を創設し、テニスというスポーツの面白さにも目覚めていく。

テニス部には、さまざまな友人たちが集ってくる。後に大学を辞めて人妻になる星野祐子、高校時代の名選手ながら、心の病にかかっている安齋克己、フォークソング歌手を目指し、実現するが、やくざの妻と不倫して将来を失うガリバー、テニスの実力は上ながら、療平に負けてしまい、テニスをやめるボンクなどである。療平は、青年は自由でなければならぬが、潔癖でなければならぬ、という大学教授の言葉や、テニスに勝つために取る戦

略を考える際に、霸道でいくのか王道でいくのかと考えたり、青年的な考えに揺れながらも、四年間成長を重ねていく。

テニスというスポーツの他には、友人たちの複雑な恋愛が、多くはトラブルと共に描かれる。婚約者のいる男と恋愛して傷つく夏子とその代表であり、療平自身も、祐子と関係を持つに到る。

やがて「特権的」な四年間が過ぎ、療平は「この四年間は、恥かしい時代やったなア」とつぶやく。夏子は、「療平、私みたいな傷物はいや？」と尋ねる。しかし二人の関係にそのまま続く明るい未来があるようにも思えない。みんなが、卒業と同時に、解散する形で、小説は終わる。

さて、このストーリーを、もう一度、小説の書き方の技術面から見直してみたい。ここでまず気づくのは、「青が散る」は、このように、大学生生活の青春を描く小説として、大学四年間という、極めて明確な時間軸を持っている点である。また、舞台も、大学とその周辺、固有名というならば、関西圏に限定されている。登場人物たちの用いる大阪弁とも関連し、このことは、限定的に、この小説を特徴付けている。要するに、枠組みがはっきりしている。

次に、人物がかなり多く登場するという事実気づく。登場人物が多ければ多いほど、その個性は描き分けられる必要がある。特に、一見悪役と見える人物の像は、小説の魅力を左右する一つの要素である。なぜなら、悪役とされるのは虚構の世界にのみある設定であり、現実世界において人間は当然ながら配役ではな

く、平等に存在しているため、先験的な悪役はいないので、虚構の成否を分ける目安となるからである。この小説で言うならば、貝谷朝海の造型がその代表であろう。

さて、これだけ多くの人物を登場させながら、実に精妙に人物像の描き分けを行うためには、それぞれの生来の個性を描くだけでは困難であろうことが予想される。人の性格は、普段は潜在し、もともと備わっているものとしては概ね明確な形を示さないものであるが、ある行動を取った時には、その特徴が極端に表れる。その代表的なものは、恋愛である。普段大人しいと思っていた人物が、恋愛の場面では、急に大胆になったりする。つまり人物像は、根源的な性質ではなく、表層的な行動の表れとして描かれる時、極端化され、わかりやすくなるのである。虚構である小説は、この絡繰りをしばしば利用する。この小説も、先に書いたとおり、恋愛について複雑な局面ばかりを描くので、人物像をうまく描き分けることに成功しているものと考えられる。祐子の造型などはその典型であろう。ちなみに宮本輝は、『宮本輝』（『新潮』四月臨時増刊、一九九九年四月）に収められた、「宮本輝への52の質問」という、愛読者から募集した宮本輝への質問のうち、「『青が散る』の三人の女性、夏子、祐子、恭子のうちで、宮本輝さんが一番好きな女性のタイプは誰ですか」という質問に答えて、「夏子に祐子がまざれば一番いいんじゃないかと思えますが（笑）。やっぱり祐子かな。祐子に一番愛情を感じて書きましたね。恭子はちょっとヤクザかな。」と答えている。

もう一つは、テニスそれ自体である。テニスは、他のスポーツにも増して、良くも悪くも、メンタル面が強く影響するスポーツであり、また、三セットマッチのような長い試合になると、ゲームにドラマ性が否応なく入り込む。やすやすと勝つものと思えば、油断からたちまち逆転されてしまうスポーツである。このテニスの形を描くことで、人物造型をも行っているわけである。これは登場人物の性格の、実に高度な描き分けの方法と呼べよう。

舞台背景の工夫についても見ておきたい。

この小説は、大阪を中心にした物語である。実際に追手門学院大学のある茨木を始め、北摂や大阪市内、また阪神間の地名が数多くちりばめられている。作品の舞台が、ここに通う学生たちの生活圏に限定されているわけである。

ところで、追手門学院大学については、1章の冒頭に以下のよう書かれている。

三月半ばの強い雨の降る寒い日、椎名燎平は、あまり気のすまないまま、大阪郊外茨木市に開学となる私立大学の事務局へ行った。

大学は田圃や農家に囲まれた衛星都市の一角の、小高い丘の上に建っていた。真新しい校舎のあたりからときおり強い風が吹き降りてきて、長いアスファルトの坂道をのぼって行く燎平のズボンや安物のスウェードの靴をびしょ濡れにした。(略)

その学院は小学校から高校までの一貫教育を目玉に、おもに金持の子弟の通う私学として八十年の歴史を誇っていたが、大学だけは持っていなかった。学校経営陣の積年の念願が叶って、いよいよ大学開校のはこびとなり、文学部、経済学部あわせて七百名の第一期生を募集したのである。

また、11章には次のようにも書かれている。

遅咲きの桜が、坂道の上に花びらを落としていた。(略)
三年前、療平がこの大阪の茨木市の丘陵に建つ大学に入学してきたとき、文学部と経済学部を合わせて、わずか七百名の学生しかいなかったのだが、ことしの新入生を入れると、学生数は三千二百名に増えていた。学舎も、一号館の裏に二号館が建ち、その横に図書館が作られた。そして現在、新しく三号館が完成しようとしている。大学の建物と並ぶようにして、それまで大阪城の横にあった中学部と高校部の校舎がこの丘陵に移転して来て、真新しい白い輝きを春の光の中に浮かびあがらせている。

これは、虚構とはいいながら、かなり忠実な描写である。

『追手門学院大学五十年志』(追手門学院大学、二〇一六年三月)の第一部「トピックで描く五〇年小史」によると、追手門学院の歴史のはじまりは、小学校の前身である大阪偕行社附属小学

校の一八八八年に遡る。それから数えれば、一九六八年で八〇周年である。追手門学院大学は、一九六六年四月一日、経済学部(経済学科)と文学部(心理・社会学科、東洋史学科、イギリス・アメリカ語学文学科)の二学部四学科で開設された。設置認可申請時の定員は、経済学部二〇〇名、文学部一六〇名で、一期生は、経済学部三七三名、文学部一四四名の計五二七名であった。小説では七〇〇名となっているが、「一九六九年、一年から四年までの学生がすべて揃う完成年度を迎えた本学は、入学定員を経済学部で一〇〇人増、文学部で四〇人増の五〇〇人へと拡大し、学生数三〇〇〇人弱の大学となった。」とも書かれているので、小説の現在時においては、ほぼ現実に近い数字と言えよう。

建物についても、同書の「年表」によると、開設の翌年、すなわち、一九六七年四月に二号館が竣工し、一九六九年には研究棟、一九七〇年には図書館が竣工し、さらに一九七一年には、三号館が竣工した。宮本輝が卒業する一九七〇年には、竣工前ながら、確かに「完成しようとしていた」状態にあった。また、中学部・高等学部については、『追手門の歩み』(追手門学院、二〇一一年四月)によると、大学開設から一年後の一九六七年四月一日、それまで大阪市中央区大手前にあった追手門学院高等学部が茨木市に移転し、同時に中学部が新設された。大手前の中学部と高等学部も存続し、中学部と高等学部はこの時から二校舎制となっている。

新設大学であるために、第一期生である学生たちと共に、大学

自体も、この四年間で「成長」したわけである。

その一方で、この小説には、茨木市の記述は他にほとんど見られない。登場人物たちの生活は、大学以外では、他の場所に求められている。そしてそれら場所の記述にも、具体的な固有名が頻繁に用いられている。

療平と金子と夏子が、最初に酒を飲んだのは、大阪である。

三人は国鉄で大阪駅まで出た。先に夏子の買物につきあわされて、梅田新道にあるドイツ風のビアホールに入った頃は、もう夕暮時だった。

この梅田新道にあるビアホールは、おそらく現在のアサヒスパードライ梅田の前身である、アサヒビアホールを指す。一九三七年の創業である。

演奏が終わると、三人はビアホールを出て、御堂筋を大阪駅の方へとぶらぶら歩いた。金子は療平との約束をちゃんと守って、ひとり大阪駅からバスに乗って帰って行った。

また、同じ梅田新道の「裏通りにある大きなパチンコ屋」に入ったり、「梅田の東通り商店街」に出たりしていることから、この「キタの繁華街」が、この小説のもう一つの大きな舞台であることが分かる。東通り商店街の「ロココ調の装飾を施した大きな

喫茶店」「白樺」はたびたび登場するし、「商店街を阪急百貨店の方へ少し戻り、大きな靴屋の角を右に曲がり、「細い路地をこゝろは左に折れ、しばらく行ってからまた右に曲がった」ところの突き当たりにあるのが、ガリバーの実家である中華料理屋「善良亭」である。ちなみにガリバー一家は、「淀川べりに家を借りて」いる。ここは正しく繁華街であり、歓楽街である。

「梅田の地下街」にある「露人」という喫茶店も、待ち合わせ場所となっている。氏家という青年実業家に、「キタの新地」に療平たちが連れて行ってもらった場面も書かれている。

また、ヤクザの妻恭子に手を出したガリバーを、助け出しに行ったホテルは、以下のように書かれている。

「パレス・ロイヤルを知ってるか。堂島の近くにあるホテルや」

療平の家から自転車で十五分程のところにある高級ホテルであった。(略)

表に出ると、タクシーを待つ長い列が出来ていた。ふたりはどしゃ降りの雨の中を堂島大橋に向かって駆けた。橋を渡り、そのまま真っ直ぐに福島の方に走った。

これらの記述と、「大きな回転扉を押してロビーに入る」立派さを考慮すると、大阪ロイヤルホテルがこれに当たることが想像される。

リーガロイヤルホテル大阪の前身は、一九三五年に中之島三丁目に開業した、新大阪ホテルである。その後、一九六五年になって、中之島五丁目の現在地に大阪ロイヤルホテルが建てられた。それでも新大阪ホテルは一九七三年まで営業を続けた。この一九七三年、大阪ロイヤルホテルはロイヤルホテルと改称し、地上三〇階建ての新館（現在のタワーウイング）もオープンさせた。作中時間は一九六六年から一九七〇年前後なので、新大阪ホテルと大阪ロイヤルホテルの二ホテル共存の時代に当たる。

この他、ホテルとしては、祐子が結婚式を挙げたホテルで、療平と祐子は食事をするが、その後二人が向かったもう一つの「ホテル」とともに特定は難しい。前者については、梅田近辺のホテルなので、大阪新阪急ホテルなどが候補の一つであろう。ちなみに大阪新阪急ホテルは、作中時間にも近い、一九六四年の開業である。

先のピアホールの場面の続きには、次のような記述も見える。

夏子の家は阪急沿線の六甲駅から山手に少しのぼったところにあることを療平はさりげなく訊き出した。ターミナルの歩道橋を渡り、二人は阪急電車の乗り場へと歩いて行った。

(略)

「療平はどこに住んでるの？」(略)

「野田阪神。阪神電車で二駅や」

これらを見ると、人物造型と舞台設定が、極めて密接に関連していることが想像される。夏子は「神戸の大きな洋菓子屋の娘」である。この店は、「フランス菓子の専門店「ドゥーブル」といい、「戦後の昭和二十五年に神戸に小さな店を開いて以来、着実に発展してきて、いまでは西宮に大きな工場と、本店以外に神戸に三軒、大阪と京都に四軒ずつの支店を拡張し、阪神間のデパートにもそれぞれ進出して、社員数三百二十名の会社にまでなっていた」と紹介されるような店である。一方、療平は、「塗料や塗装機具を販売する椎名商会」の息子ではあったが、「従業員がひとりいるだけのまったくの個人商店」で、しかもその経営も「おもわしくない」状態にあった。証明することは難しいが、大阪から神戸に並行に走る電車は、北の山側から、阪急、JR（当時の国鉄）、阪神の順であるが、山側の阪急電車の沿線は高級住宅地が多く、海側に行くほど、庶民的であるとは、よく言われることである。夏子は阪急沿線の六甲、療平は、野田阪神に住んでいるという設定が示すものが、生活ぶりの差であることは容易に想像される。

この夏子の家のある六甲を始め、神戸および阪神間の地名もまた、実に丁寧に書き込まれている。その数と詳しさは、梅田近辺以上とも云える。

まずその夏子の家であるが、療平は、夏子の父が亡くなった際、初めて「阪神電車で梅田駅まで出て、阪急の神戸線に乗り換え」、六甲に向かう。駅に車で迎えに来た夏子は、「昔からの屋敷

町を縫ってのぼって行く曲がりくねった細い道を走らせ」「大きな高級マンションの地下にある店」に燎平を連れていく。

神戸の中心地である、三ノ宮も頻繁に登場する。「ドゥーブル」の本店も、「三ノ宮センター街」の中にあつた。また、夏子の誕生日を家族と友人で祝つたのは、「元町通りの一角を北へかなりのぼったところ」にある、「桃香園」といふ、そう大きくもない中華料理店」であつた。

ある時燎平は、「阪神電車の甲子園で降りて、甲子園球場の横を通つて」、甲子園テニスクラブに行く。また、試合が終わると、「甲子園球場と反対側の、住宅の建ち並ぶ道」を歩いて行つて、夏子の車に出会う。しかしながら、よく読むと、「甲子園球場の横」であることや、「住宅の建ち並ぶ道」といふ情報は、筋の運びのためには過剰なようにも見える。そこには、明らかにこれらの土地の雰囲気再現が意図されている。

この他、「芦屋川をのぼつたところ」や、「阪神国道」を神戸の方に向かい、「阪急の岡本駅の横の道を山側へのぼり、静かな住宅地の中の四つ角を何度も右に左に曲がつた」ところにあるペーブルの家、さらには「阪神電車の香櫛園駅」、「手広く貴金属店を経営する安斎家」の、岡本の「古い屋敷の建ち並ぶ急な坂をのぼつて行つた」先にある家、燎平が夏子から衝撃的な話を聞くことになる、六甲の駅近くにある「一軒の小さな喫茶店」、また、一番最初に、夏子の車で、燎平、金子、安斎の四人でドライブした際の次のような記述など、神戸の地名は、物語の一つ一つのエピソードと密接に関連してその固有名が提示されている。

ードと密接に関連してその固有名が提示されている。

車は行先を変え、阪神国道を西に向かった。六甲の山上から神戸の夜景を眺めることにしたのである。

石屋川のほとりをのぼり、有料道路路に入る頃、西陽は弱まって濃いオレンジ色となり、六甲連山や、神戸の海をべつたりと覆っていた。(略)

山頂近くにあるホテルのティーラウンジで燎平たちはコーヒーを飲んだ。(略)

四人はホテルを出ると、車で少し下つて、道の曲がり角にある展望台まで行つた。

これらは、おそらく、六甲山ホテルと六甲山上展望台のことであろう。この場所を知る読者には、かなり強く訴える場所描写である。「車で少し下つて」といふ位置指示は、ここを知る者には、実にうまい表現に映るであろう。

さらに、安斎が入院した「明石にある精神病院」については、「明石駅からバスに乗り」、「バスを降り、小さな商店街を抜けて北へ歩いていくと、すぐ畑や田圃がひろがり始め、新興住宅地らしい、同じ型の家が並んでいるところ」にあると書かれている。これもやや過剰ともいえるほどの丁寧な描写である。

この小説は、大学四年間という時間軸を、ごく素直に、小説の記述のための時間に用いている。また、舞台も極めてリアルな大

阪である。ここで、登場人物たちは、おそらく人生において、一番変化と成長の激しいこの四年間を過ごす。小説の技術面から言い直すならば、この小説は、入学と卒業とを小説の最初と最後として設定することによって、高い一貫性を与えていると云える。その時間軸の中で、登場人物たちは、単位取得の傍ら、クラブ活動の中でも、後輩から先輩になり、いろいろな人と出会い、恋愛をし、人の死なども経験し、就職につながる活動も行う。そして多くは、この時期に、青春を謳歌しつつ、次第にそれを失うこととなる。「散る」のはまさしく、この「青」色で象徴される、新鮮さや、未熟さ、未体験であることから来る自由さなどである。この魅力的な青春の未熟さを代償に、登場人物たちは、大人、すなわち完成へと向かって、変化していく。この小説のタイトルが、「青」が「散る」であることについても、青春自体に焦点が当てられていると云うより、変化や喪失、そして後から見た時の一時性などが込められているからだと考えられる。先に見た宮本輝自身の「あとがき」には、これに関して、次のように書かれている。

私は「青が散る」の中に、そうした青春の光芒のあざやかさ、しかも、あるどうしようもない切なさとい脈の虚無とを常にたずさえている若さというものの光の糸を、そっと曳かせてみたかったと言えるでしょう。

この「虚無」という言葉の中には、いつか失われるものであるからこそ魅力的であるという、いわゆるロマンティック・アイロニーを見て取ることができる。青春を描くなら、このことに触れざるを得ないのである。これが、いわば青春なるものの鍵である。このやや難解なテーマをうまく読者に伝えるためには、舞台が複雑であったり、時間軸がぶれていたりすると、テーマがぼやけるかもしれない。この小説は、言葉にしにくいほど、切なくも、誰もが戻りたいような、喪失した青春の何か、言い換えれば、失ったからこそ、美しい何かを描くという難行を成就させるために、敢えて、時間軸を、大学四年間とシンプルなものとし、舞台も大阪に限定したものと考えられるわけである。

思えば、この小説の作中時間は、一九六四年の東京オリンピックと一九七〇年の大阪万博の間にあり、日本が高度経済成長を遂げる真つ只中に設定されていた。作中には、「療平たちの大学の庭球部は、ことしから横浜にあるY大とのあいだで、年に一回定期戦を行なうことになり、六月二十五日に新幹線で来阪するY大庭球部の選手たちを新大阪駅に迎えた。」という文章が見られるが、これについても、この新大阪駅が、東京オリンピックに合わせて一九六四年一〇月に開業した西の終着駅であったことを考えると、新幹線の駅に到着するというのは、作中時間から見れば、ごく最近可能になった事実であったことがわかる。先に見た大阪新阪急ホテルの開業が一九六四年、また、大阪ロイヤルホテルの開業が一九六五年であることも合わせ、当時の大阪の活気が窺え

る。戦後に生まれ変わった大阪の街もまた、この頃、正しく青春という成長の時代にあったのである。

二、テニス小説としての「青が散る」

もちろん、このことは、短絡的に、小説の中身が単純である、ということの意味するのではない。小説は言葉だけでできた言語芸術であるので、例えば映画など、映像によって指示されるものに一定の形が先験的に与えられている芸術より、一般的に想像する範囲が広く、またその質もより自由である。そのために、読みに幅が生じることとなる。やや大袈裟に言えば、小説の舞台や人物像などは、読む人によって、どんな風にも読むことができ、外延と内包とは反比例することが通常であり、枠組みが単純であることで、中身が集約的に濃度高く描かれることとなる場合も多い。

さらに言えば、小説の読み方には、作者側の意図より、読者の興味が優先する場合もある。この小説に描かれる要素のうち、特定のものに殊更に焦点を当てて読む読者にとっては、ストーリーや人物像などよりも、その特定の要素の描かれ方の善し悪しによって、小説の像が変化する。そのために、同じ小説であるにも関わらず、読後の印象は、その対象に興味を持つ読者とそうでない読者との間で、著しい相違を生むこともある。例えば、この小説の中に挿入される、ガリバーの歌などがその典型であろう。後

にテレビドラマ化された際、「人間の駱駝」が、当時、大塚ガリバーという歌手名により、一九八三年にレコード化された。作詞は、宮本輝と秋元康、作曲は長渕剛という、今から見れば、実に豪華なスタッフである。ちなみにB面は、「煉瓦の色のかげろう」という、これもこの小説に登場する曲で、編曲の瀬尾一三を含め、同じスタッフで作られている。

ここで留意したいのは、テレビドラマ化の前に小説を読んだ読者の中には、作中のガリバーの弾き語りを、ギターや声と共に想像した読者も多くいたであろう点である。当時、特にフォークソングやニューミュージックに興味を持っていた読者は、歌詞から、そのメロディーまでも類推して読んだのではなからうか。ガリバーの曲に、挿入歌以上の意味合いを見て取る読者がいる可能性は高い。そのような読者にとっては、この小説の相貌は、療平たちの恋愛譚からやや離れ、ガリバーの曲の持つメッセージ性を優先させるような小説と見えることも想定されるのである。

その一方で、もちろん、全く曲を思い浮かべずに読む読者もいたかもしれない。その場合、両者の間で、読書の印象が異なるのも当然であろう。

さて、この小説において、このような読書の印象の差を生じさせる要素の最大のもの、やはり、作中のテニスというスポーツであろう。

まずそれは、「大阪の鞆コート」や「甲子園テニスクラブ」、「香櫨園ローンテニスクラブ」など、実在のものとして登場して

くる。しかし、この土地の名の指示性については、これらを知っている読者への効果を、知らない読者へ拡げることが困難であろう。むしろテニスというスポーツそのものの属性の方が、効果を上げやすいものと想像される。

筋や構成において、この小説を作り上げる最も重要な要素の一つは、言うまでもなく登場人物たちが没頭するこのテニスである。この小説は、一面で、テニス小説とも呼ぶべき風貌を示している。そこには、テニスをめぐる特別の用語や、テニスを知っているとよくわかるこのスポーツ独特の雰囲気などが鏤められている。そこには、テニスをプレーしたことのある者と、そうでない者との間を分ける、知識の差が歴然と存在している。しかしながら、一方で、小説家は、この差を埋めるべく、テニスを知らない読者にも、テニスというスポーツの特質を伝えようとするであろう。この、差異と共通性の中で、読者は、この小説を面白く読むことができるかどうかを試されている。

療平と金子は、まずハード面の問題として、新設の大学にテニスのクレイコートを作ることから始める。同時に、ソフト面とも云うべき、テニス部という人間の組織を作り上げることも並行して行われる。これについては、テニスに限らない設定上の問題とすることができる。

それに比して、小説の中に、テニスの試合の様子をたつぷりと書き込むことは、かなりの困難を伴うものと思われる。一試合の中で選手たちの演じるドラマは、ただ技術だけのものではなく、

多く精神面に関わるために、それだけで一編の物語を構成するようなものとなっている。読者は、試合の場面を読む際には、いわば二重の興味をもってこれに向き合っている。テニスについては、常に勝敗を気にしつつ、小説自体の展開の意外さに期待もしているからである。この読者の期待を裏切らないように、しかも無理なく試合の展開を描き続けることは、至難の業と思われる。この作品中、この難しさに立ち向かった最大の例は、第10章のボンクこと柳田憲二と、療平の試合であろう。この章のほとんどを使って、スリーセットマッチすべてを書き切っている。ほんの一部を引用しても、次のようなものである。第一セットを療平が取り、次をボンクが取って、セットカウント一対一の後の、第三セット五―四で療平リードの最終ゲームの場面である。

第十ゲーム、療平は最初のサーブをダブルフォルトした。〇―十五になった。次のサーブはいいサーブだったが、それ以上にボンクのレシーブはスピードと角度があり、療平は打ち返せなかった。〇―三十となった。療平の顔から血の気がひいて行った。体がこわばってきた。だが療平はグリッブを強く握りしめ、体をねじって力まかせにサーブを打った。ボンクはそのサーブを横に飛びながら返したが、わずかにサイドアウトになった。十五―三十となった。四回目のサーブはサーヴィスコートの真ん中に深く突き刺さるように入って行って、ボンクは棒立ちのままボールを見送った。三十

—三十になった。(略)療平はボールの下を見て、ポンクはバックに強いアプローチショットを放ち、ネットに出た。ポンクはやはりロブをあげた。しかしスピンのかかっている守りのロブだった。療平はそれを予測してあまり前に詰めたので、頃合のボールが頭上に落ちて来た。彼は充分スマッシュのフォームを固めて、右サイドに打ち込んだ。ポンクはボールを追って走りながら、すでにきらめてラケットを投げつけた。四十一—三十で、療平がマッチポイントを取った。ざあつと療平の全身が鳥肌立った。マッチポイントを取られて、ポンクは必ず前に出てくる。うしろでじっくり粘るだけの余裕は、もうポンクにはない筈だった。療平は、ここでハイボレーを決めたら、ポンクは凄いやつだと思った。どたん場で、ポンクはハイボレーを決めるかミスするか。療平は前のゲームで四回たてつづけにポンクにハイボレーを決められたことを計算に入れていた。ポンクがハイボレーを決める確率は三十パーセントだ。次は絶対にミスをするか、あるいは自分にとって絶対のチャンス球を与えてくれるかのどちらかだ。療平はもう強い危険なサーブは必要ないと思った。前におびき出して、最後のハイボレーをさせてやる。療平はスライスをかけてサーブを打った。ポンクは強いサーブを警戒してうしろに下がっていたから、少し前に走りながら打ち返して来たが、平凡な球だった。療平はサーブミスラインのあたりにゆるい球を打った。ポンクはネットについたが、そ

のつき方には迫力がなかった。療平はこの試合でもう何回打ったか判らないボールをポンクの左肩の少し上あたりにゆるく送った。ポンクがそのハイボレーをクロスに打つか、逆クロスに打つか、まったく判らなかつたが、療平は右に走った。勘でも計算でもなく、ただ自然にそちらに走ったというだけだった。ポンクはやや低めのハイボレーをクロスに打った。療平は逆をつかれたのだった。だがコートの隅に飛んで行ったポンクのボールを見て、貝谷は「アウト」と叫んだ。ボール二個分程、間違いなくコートの外に出ていたのだった。療平は勝った。試合は始まってから、三時間四十分たった。いた。

テニスの専門的な用語がかなり用いられているが、読んでいるとそれもさほど気にならないものと想像される。そして、全体的な枠組みから、まずゲームが一進一退であることが想像されるために、よけいに緊張感をもって読書を強いられることとなる。物語を読む多くの読者がそうであるとおりに、この小説の読者も、読書を開始した当初より、中心的な登場人物である療平・轟眞の立場に立っている。この療平が勝つことを期待する読者にとって、じらされたかと思うと喜ばされ、あたかもテニスの上質な相手に翻弄されるように、試合の成り行きを追ってしまふこととなろう。この素材は、読者を引きつけるのに実に効果的なものと云わざるを得ない。ただし、うまく書けた場合にはという条件付きでは

ある。

前掲の『宮本輝』（『新潮』四月臨時増刊、一九九九年四月）には、「50人に聞く 宮本文学」の一冊」というアンケートも収められているが、プロテニスプレーヤーの佐藤直子は、「青が散る」を挙げた上で、次のように答えている。

私が一番面白く、息もつかずに読んだのは、燎平とボンクのテニス対決のくだりであった。25ページにも渡るその長い試合の1ポイント、1ポイントが、ただ文字を追っているだけのはずの私の目に、はつきり映し出された。みごとな描写だ。

プロのテニスプレーヤーにも息をつかず読ませる描写であるとのことである。しかしそれは、おそらく、テニスをよく知るから分かる「みごとな描写」だということではあるまい。ここには、二人の生き方やものの考え方までが書き込められている。二人はテニスの試合を通じて、お互いという存在の全体を交換するかのようである。テニスを介して示されるこれら人物像の提示は、究極の人物描写として、あらゆる読者にも効果的に伝わるであろう。

これが、テニス小説、ひいてはスポーツ小説全般の魅力の一つであることは間違いない。特にテニスのシングルスは、相手が一人であり、かつ、一定の時間の流れの中で勝敗が左右される

ので、物語性が高いと言える。その意味で、この小説は、テニスを実にうまく取り込んだ作品と判断されるのである。

三、「青が散る」の中の匂いや香りと触感

この他にも、この小説は、ストーリーからかなり離れた読み方が可能である。青春小説であることも深く響き合う、五感の表現の豊かさなどがそうである。

例えば、2章に、次のような文章が見られる。

雨滴を吸った木綿のシャツが、かすかに青臭い匂いを発していた。燎平は顎を引き、シャツの第二ボタンも外して自分の胸のあたりの匂いを嗅いでみた。うっすら油気の混じった、自分の匂いがした。おとなの匂いではなかった。

何気ない表現であるが、このように、自分の匂いに意識的である男を描く場面は、さほど多くはない。思い浮かぶのは、夏目漱石の「それから」（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』一九〇九年六月二七日―一月一四日）の長井代助などであろう。

其所で叮嚀に歯を磨いた。彼は歯並の好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで綺麗に胸と背を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よ

く拭き取つた様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれは夫にも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細く且初々しく、口の上を品よく蔽ふてゐる。代助は其ふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映してゐた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる。

ただし、代助は、このとおり、極めてナルシステックな男である。一方、療平は、それほどではない。ここには、匂いを描くことその他の目的があるかもしれない。例えば4章の冒頭は、以下のようなものである。

木犀の匂いの中にいた。療平は額の汗を指先でぬぐい取りながら、ときおり香りを嗅ぐために息を吸つた。花の匂いは、とぎれとぎれに足元からゆらめきたつてくるような気がした。広いグラウンドを取り囲む野生の樹木は、どれもみな花を咲かせないものばかりだったから、木犀は、療平のいる

場所からうんと離れた地点で満開になつてゐるらしかったが、それでも嗅ぐ者を一瞬けだるくさせる芳香を忽然とテニスコートの中に湧きたたせてくるのである。

思えばこの表現も大胆なものであろう。一文目が、「木犀の匂いの中にいた。」であることは、主語も抜いて、匂いに焦点を当てる意図が強く感じられるからである。そこには、匂いの持つ、連想や回想の機能が関わつてゐるようである。同じ章には、次のような表現も見られる。

木犀の香りを鼻孔に含み入れるたびに、療平の心には夏子の微笑やら姿態やらが浮かんできた。すると必ずいつの日か、夏子が自分の中に入つてくるような気がして幸福になるのである。

また、この文章のすぐ後には、次のような表現も見られる。

療平は、シングルの試合をするのが好きだった。試合のときだけ使わせてくれる新品のボールを鼻先に当ててその軽い揮発性の匂いを嗅ぐと、闘志が湧いた。

さらに、同じ章の後の方には、踏み込んだ表現が見られる。

阪神電車で梅田駅まで出て、阪急の神戸線に乗り換えた。六甲駅までの時間が、ひどくまどろこしかった。電車の窓から、蒸した風が木犀の匂いと混ざり合って入ってきていた。木犀の花が、あたりを蒸しているような気もしたし、実際に気圧が下がって、雨が近づいてきているような気もした。夏子も、体のどこかに、木犀に似た濃密な匂いを秘めてはいはいまいかと思ったとき、燎平は突然、何も身につけていないすべすべした夏子を抱いている空想にのめり込んだ。ことしの春、クリーニングに出して、そのまま洋服ダンスにしまっていたグレーの丸首のセーターを引っ張り出し、大慌てで着込んできたのだが、木犀の匂いとそのセーターのナフタリンの匂いと一緒に、燎平の心を絶えずけだるく刺激してくるのである。

このとおり、けだるさを含めた、うまく言葉にできない感覚が、匂いの表現によって、いわば代替されている。このような五感の感覚表現は、心理などを表現する代替効果が高いものと考えられる。

匂いばかりではない。初めて夏子の運転で、四人で六甲までドライブした際、燎平は、火照っているという夏子の頬を、ごく自然に両の掌で包む。また、夏子の父が死んだ時、呼び出されて会いに行った燎平は、夏子から頬にキスされる。そのときも燎平は、「頬に生温かいものがよぎるのを感じた。」と、温度で感じ取

っている。ちなみにその帰りの最終電車は、「かすかにアルコールの匂いの漂う」電車と書かれている。

このような五感の表現に殊更に注目して読むと、青春期の形容しがたい不安定な感覚が、これら五感の感覚表現によって、読者に伝えられようとしていることが想像されてくる。

おわりに

他にも、この小説には、多くの読みの切り口が可能である。例えば、佐野夏子の家の洋菓子に着目して、神戸という土地柄と結びつけた読みも可能であろう。「桃香園」の中華料理も出て来るが、これも神戸を作る一つの要素である。

さらに、なぜか賢島の「志摩プラザホテル」なるものが登場してくるので、伊勢志摩という土地柄の意味合いを探るのも有効かも知れない。しかもこの場面は、夏子に思いを寄せてきた燎平にとっては、悲劇のどん底ともいうべき場所である。燎平がここに向かう道程の描写は以下のとおり執拗すぎるほどである。

地下鉄の難波駅から近鉄電車の賢島行き特急に乗り換えた。難波から賢島までは二時間とちよつとだった。車窓から大阪の街が見えた。鶴橋や今里の、ごみごみとたてこんだ街並が過ぎると、やがて低い山々が線路の両脇に見え始めた。宇治山田駅まで、ずっと単調な風景がつづいた。(略)鳥羽に近

づく左手に海が見え始めた。(略) 曲がりくねった線路と並ぶ格好で、国道百六十七号線がつづいていった。(略) 鵜方を過ぎた途端、こんどは右手に入江が見え、そこに真珠を養殖するためのいかだが浮かんでいた。鵜方から賢島までは十分足らずで、車内放送の、間もなく終着駅の賢島に到着するとアナウンスが聞こえたとき、燎平の心臓は急に動悸が強くなり、体のあちこちがこわばってきた。

このとおり、沿線の実況は、燎平の心理状態に全く関係がないように描かれながら、やはり最後の一文から推察されるように、その背景に、これから恋人と一緒にいる夏子に会ってから展開されるであろう、実にドラマティックな場面のプロローグの役割を果たしていたこともわかるのである。

「志摩ブラザホテル」についても、「リゾート・ホテルではあったが、いかにも一流ホテルらしい格式を持った建物だった」という表現から、読者はおそらく容易に、「志摩観光ホテル」を思い浮かべたものと考えられる。

ふたりはその扉からホテルの裏庭に出た。右に曲がりながら降りて行く石の階段があった。入江の波打ちぎわのところに、ホテル客のための栈橋が架けられてあった。そこは、英虞湾を形成している幾つもの入江の一角で、大阪の街中よりもうんと暖かい陽が差し、海鳥の鳴き声が潮風に混じって聞

こえていた。(略)

大王崎から御座に向かって伸びる半島の一角が、荒々しい熊野灘の黒潮をさえぎって、英虞湾の中は、そこだけ美しい沼みたくに静まっているのだった。

この場面も、読みようによれば、燎平の心理を比喩しているとも云えよう。地名は、場所を示すのみならず、もう一つ別次元の意味合いを含み持たされることは、よくある表現手法である。

さて、これら作者の工夫については、それが小説全体にとつて、如何に効果的であるかどうかの検証が為された後には、それらの切り口自体が、この小説の魅力の案内となるはずである。

しかしながら、これらの要素がいきなり作品の構造の中心を形成するとも思えない。

「青が散る」は、一見単純とも見える四年間の大学生活という枠組みの中で、しかもさほど回想や予想など行ったり来たりするようなことのない、自然な時間の流れを設定し、その四年間という限定された時間の中に、誰もがその時代を経験したことのある「青春」なるものを描き込むという、大まかな構造を持っている。このような小説を構想することは、考えようによっては、実に大胆な試みである。二〇歳前後の恋愛感情や失恋、歌手になるなどの将来に関わる夢やその挫折などは、普遍的なテーマであり、これも目新しいものではない。また、作中のテニスに代表されるような、大学生活におけるクラブ活動もまた、多くの卒業生たちが

自らの大学生活を振り返って第一に思い浮かべるものであろう。これらの、いわばありふれた材料を、大学近辺の大阪周辺に舞台も限って描いたこの小説は、実に陳腐でセンチメンタルな小説に墮する危険性を持っていると考えられるからである。誰もがよく知っているはずの「青春」なるものは、しかし最も描きにくいものである。なぜなら、「青春」なるものは、多くの読者に共感共有されるはずの感覚や要素で成り立っているものではあろうが、それぞれの読者にとっては、環境や条件が違うために、自らの経験と全く同一化できるものでもないので、常に微妙にずれた感覚をもたらしものでもあると想像されるからである。

逆に言えば、読者の個別の「青春」体験とは別に描かれる、ある小説の「青春」なるものが、読者のものとは相違するものでありながら、読者の「青春」の何かを喚起するものであるならば、その小説は多くの読者に受け入れられるであろう。

そのために用いられた手法が、テニスの試合の駆け引きによる人物像の代替的描写や、読者の五感により作中世界の再現を促す描き込みなのではなからうか。人間関係の危うさに代表される、うまく言葉にできない「青春」の空気を、テニスのゲーム展開というもう一つ別のドラマ設定と、五感の描写によって代替して読者に伝えようとしたのではなからうか。

そして、洋菓子や神戸らしき、賢島などの要素の一つ一つが、すべて、この目的達成を補完する要素として特定される時、小説の全体像の構成美が、改めて姿を現すものと考えられるのであ

る。